

学校教育の言語と 機能言語学の接続

外国につながる子どもたちの包摂を見すえて

外国につながる子どもたちを包摂するために、「ことば」をそもそもどのように捉えるのかという観点から、子どもたちの発話を理解し、メッセージを伝え、対話するうえで寛容です。しかしその点を真っ正面から捉えて、議論する機会には言語教育分野において、これまでほとんどありませんでした。

本シンポジウムでは、機能言語学的な発想を重視し、これまで十分に検討されてこなかった「外国につながる子どもたち」と「言語の機能」の関係性を「言語」「外国につながる子どもたちの教育」、さらに包摂としての「マルチモーダル」「学校カリキュラム」という形で言語と言語教育、学校の授業、カリキュラムを一貫する形で捉え、その可能性を検討していきます

- 機能主義言語学と外国につながる子どもたちの教育の接続のために
庵功雄（一橋大学）
- 言葉のみかた 機能言語学の観点から
佐野大樹（アナリティカル・リンゲイスト）
- 「CALPの‘A’？」あるいは機能言語学の視点
外国人児童生徒教育を担う教師の「言語」への目を磨く
南浦涼介（広島大学）
- マルチモーダルな言語教育と機能言語学的視点
奥泉香（東京学芸大学）
- イギリスの言語教育カリキュラムにおける機能言語学の受容とその後
小柳亜季（千里金蘭大学）
- ディスカッサント
宇佐美洋（東京大学）

日時・場所

2025年2月22日（土）13:00-17:00

対面：新橋ビジネスフォーラム（100名まで）

オンライン：ZOOM（300名まで）

申し込み

こくちーずからお申し込み下さい
対面

https://kokc.jp/e/sfl_edu_ftof/

オンライン

https://kokc.jp/e/sfl_edu_online/



対面
参加申し込み



オンライン
参加申し込み

学校教育の言語と機能言語学の接続

—外国につながる子どもたちの包摂を見すえて—

外国につながる子どもたちを包摂するために、「ことば」をそもそもどのように捉えるのかという観点から、子どもたちの発話を理解し、メッセージを伝え、対話するうえで肝要だが、その点を真っ正面から捉えて、議論する機会が言語教育分野において、これまでほとんどなかった。本シンポジウムでは、「言語」「カリキュラム」「ことばと授業」「教師教育」をどう捉えていくのかを機能言語学の観点から議論し、その可能性について論じる。

本シンポジウムは、次のような構成で以下の登壇者によって進められる。まず、庵からは、機能言語学と外国につながる子どもたちの教育および研究がなぜ結びつくのか、その企画意図を概観する。その上で、佐野からは、そもそも機能言語学的な言語観とはどのようなことかについてその言語観の見取り図を示す。

それをふまえて、「外国につながる子どもたち」と機能言語学がどのようにつながっていくのかを3名の発表者の報告から検討していく。まず南浦からは、機能言語学と外国人児童生徒教育および研究の接点がどのようなところにあるのかを捉え、その視点を具体的にうながしていくための教師教育の試みについて紹介する。その上で、こうした視点をより外国につながる子どもたちの「包摂」の視点に還元していくために、第3発表者の奥泉からよりマルチモーダルな視点から言語とその機能に焦点を当てた学校の実践可能性について、特に国語科教育の点からの検討を行う。第4発表者の小柳からは、さらに学校全体のカリキュラムのレベルの包摂を捉えていくときに、機能言語学的視点がどのように教育として機能していくのかをイングランドのカリキュラム改革の試みから検討する。

このように、本シンポジウムでは、これまで十分に検討されてこなかった「外国につながる子どもたち」と「言語の機能」の関係性を「言語」「外国につながる子どもたちの教育」、さらに包摂としての「マルチモーダル」「学校カリキュラム」という形で言語と言語教育、学校の授業、カリキュラムを一貫する形で捉え、その可能性を検討していく。

1. 機能主義言語学と外国につながる子どもたちの教育の接続のために
庵功雄（一橋大学）
2. 言葉のみかた—機能言語学の観点から
佐野大樹（アナリティカル・リングイスト）
3. 「CALP の ‘A’ ?」あるいは機能言語学の視点——外国人児童生徒教育を担う教師の「言語」への目を磨く
南浦涼介（広島大学）
4. マルチモーダルな言語教育と機能言語学的視点
奥泉香（東京学芸大学）
5. イギリスの言語教育カリキュラムにおける機能言語学の受容とその後
小柳亜季（千里金蘭大学）
6. ディスカッション
宇佐美洋（東京大学）

機能主義言語学と外国につながる子どもたちの教育の接続のために

庵 功雄（一橋大学）

外国につながる子どもたちに対する日本語教育は、この四半世紀以上にわたって、日本語教育の主要テーマであり続けており、教育実践、教材開発、その他の面で多様な知見を生み出してきている。

庵が研究代表者を務める科学研究費助成金（科研費）の研究においても、過去数期にわたってこうした子どもたちに対する日本語教育、継承語教育について研究を続けてきている（庵 2016、志村編 2019a, b, 2021）。

上述のように、こうした子どもたちに対する日本語教育は盛んに行われているものの、それと言語学的知見（「ことばの見方、捉え方」）の接続は十分とは言えない。こうした言語研究と言語教育の接続という観点から重要な知見を与えてくれるのが、ハリデー（Halliday, M. A. K.）が提唱した選択的体系機能言語学（Systemic Functional Linguistics. SFL）である。

ことばは文脈の中で使われる。例えば、「うまい言い方を見つけるのは難しいなあ」と「適切な表現の発見には困難を感じる」におけることがらの内容はほぼ同じだが、両者が使われる場面は異なる。われわれは客観的内容を述べるためだけにことばを使っているのではなく、同じ客観的内容であっても、「誰が誰に」「どのような場面で」「どのような媒体で」といった様々な変数を考慮しながらことばを使っている。こうした変数の集合体が「文脈（コンテキスト）」である。「文脈」は1つの文の解釈といったレベルから、「移民」の増加に伴う言語規範の変容といったレベルにまで及ぶ。

こうしたことばの多面的な姿を捉えるには、「誤用－正用」といった静的で平面的な捉え方では不十分である。SFL はことばを「機能」の観点から捉えて多層的に分析するが、こうした SFL の言語観は、言語教育に関わる様々なテキスト（テキスト）の立体的な分析を可能にし、ことばが持つ社会的文脈を含む様々な側面を子どもたちにわかりやすい形で解きほぐすことを可能にする。SFL ではまた、言語を「対立」の観点から捉える。ある表現を「用いる」ということは別の表現を「用いない」ということでもある。こうした観点は、奥泉発表で扱われる絵の解釈で言えば、その場にある人が「いる」ことが、（本来そこにもいいはずの）別の人が「いない」ことの意味を考えさせる、といった問題を教師に突きつけることになる。

本シンポジウムでは、これまで日本国内の日本語教育の世界でほとんど取り上げられてこなかった SFL 的な言語観、言語教育観を紹介し、そうしたことばに対する捉え方が外国につながりを持つ子どもたちに対する教育にも有効であることを論じる。

こうした SFL の特徴は、外国につながる子どもたちの教育のみならず、留学生に対する日本語教育、日本語母語話者に対する国語教育を含む言語教育全般にとって有用であると考えられるが、本シンポジウムの各発表者は、SFL の多層的な言語分析の手法が、特に、外国につながる子どもたちの教育に有用性が高いと考えている。この点については、この後の4発表で具体的に見ていく。

本シンポジウムの構成は以下の通りである。

佐野発表では、SFL 的なことばの見方とそれを支える理論的背景について、具体例を用いながら、わかりやすく説明するとともに、言語教育における SFL 的知見の有効性についても紹介する。

南浦発表では、外国につながる子どもたちに対する教育に携わる教員養成の観点から、SFL 的言語観を教師が内在化することの有用性を、自身が担当した教員研修の際の具体例を用いながら、「文体」や「ジャンル」に着目して論じる。

奥泉発表では、現在の国語科教育において重要度を増してきている、絵や写真などを含むマルチモーダル・テキストの理解および教育における、SFLの基本的な言語観である多層的メタ機能という見方の有効性を具体例を交えて論じる。

小柳発表では、移民の子どもの増加などの点で、現在の日本との類似性が見られる1960年代以降のイギリスで行われた英語教育の改新運動である言語意識運動の展開を紹介しながら、そこにSFL的知見がどのように取り入れられていったかを論じる。

最後のパネルディスカッションでは、4名の登壇者と指定討論者の宇佐美との間で、SFLと学校教育の接続の可能性を論じるとともに、フロア参加者とも議論を深めていきたい。

文献

庵功雄 (2016) 『やさしい日本語—多文化共生社会へ』 岩波書店

志村ゆかり編 (2019a, b, 2021) 『中学生のにはほんご 日常生活編、学校生活編、教材編』 スリーエーネットワーク

1. 選択肢としてのことば

コロナ禍を経て、職場におけるコミュニケーション問題が増加しているという報告が多数上がっている。コロナ禍ではコミュニケーションの場面や種類が制限され、オンラインコミュニケーションが中心となったことで、多様な文脈で言葉がどのような意味を持つのか、もしくは、言葉をどのように選ばばよいかを実体験を通して学ぶ機会が減少した (Kniffin, K. M., Narayanan, J., et al. 2021)。このことが、コミュニケーションに関する問題の増加をもたらした一因ではないかと考える。ただし、ことばの捉え方の差異に起因するコミュニケーションの問題は、コロナ禍を経て特に着目されるようになったものの、以前から教育の場も含めて、様々な状況で点在してきたものと思われる。

本発表では、機能言語学、特に、SFL (Systemic Functional Linguistics)の知見に基づいて、人と人が対話をする際に、ことばを「選択肢」として捉え、学習者が扱うことができる選択肢を体系的に増やしていくことが、コミュニケーション問題を減らし、さらに、子どもたちとの対話を深めていくうえで重要であることを論じる。

2. ことばの機能の把握から多層的な意味の解釈・伝達へ

ことばの捉え方を考慮するうえで重要なことのひとつが、ことばを伝えるという行為は内在的どのような機能と結びついているかを把握することにある。ことばの機能の種類を認識することで、今まで単層的にしか見えなかったことばの意味も、多層的に解釈・伝達できるようになる (佐野 2024)。

ことばについて学習・考慮する際には、内容的・経験的な意味に着目することが多い。例えば、「近年この地域では、夏に集中豪雨が発生する傾向があるようだ」という発話を解釈する場合、どのような出来事（「発生」）が言及され、何が出来事に関与している要素としてとりあげられているか（「この地域」「集中豪雨」など）に着目し、発話があらわそうとしている経験を捉えようとする。

しかし、ことばの機能は、知識や経験などを伝達・解釈することに限定されない。ことばにするという行為は同時に、話し手と聞き手の間に対人的な関係を築いたり、維持したり、崩壊させたりすることに繋がる。このような視点にたって前述した例文を捉え直してみると、この発話では「発生する」でなく「発生する傾向があるようだ」というモダリティ表現が用いられているということに気づく。話し手が断定的な見解を避け、議論や意見交換の余地を残すことで、反論の余地を残し断言による誤りを避けようとしている意図が読み取れる。

さらに、ことばとして表現することは、内容的な意味や対人的な意味を、相手にどのように伝えるかをメッセージとして形成することにも繋がる。同じ内容的・対人的な意味であっても、表現方法の選択によって、何に着目するか、意味と意味にどのような結びつきを与えるメッセージにするのかは変わってくる。例えば前述した例文は「この地域では近年…」と始めることも「夏に集中豪雨が発生する傾向が、近年この地域…」や「集中豪雨が夏に発生する傾向が…」と始めることも可能であるが、「近年」を文頭に配置することを選択して表現されており、このことから、「この地域」や「集中豪雨」よりも「昨今」の事象の変化に着目して、メッセージを伝えようという意図が背景にあるのではないかと解釈することができる。

このように、普段は内容的な意味に着目して単層的に捉えがちな発話であっても、異なる機能を観点とし、選ばれた選択肢と選ばれなかった選択肢を踏まえながら意味を解釈することで、多層的な解釈が可能となる。

3. ジャンル横断アプローチによることばの選択肢の体系的獲得

ことばを選択肢として捉えることで、多層的に意味を解釈することが可能になると述べたが、そもそもことばにどのような選択肢があり、それぞれの選択がコミュニケーションでどう機能する可能性があるかを学ぶにはどういった方法があるのだろうか。

その方法のひとつに、ジャンル体系を横断的に学習するアプローチがある。ひとつひとつのジャンルでどのようなことばの特徴があるかを個別に学習するというのではなく、例えば、Narrative → Rescount → Account → Explanation → Exposition といったように、ジャンルの社会的な目的を達成するためにどのようなことばの選択肢があり、目的によってことばの選択肢がどう変化していくのか学習していく。ジャンルを体系的に学習することで、学習者が扱うことができることばの選択肢を増やし、さらに、ある意味を解釈・伝えようとするときに、どの選択が効果的かを習得していく方法である。

ことばを選択肢として捉えられるようジャンルを体系的に学習していくことは、学習者がことばを解釈したり伝えたりする際に扱うことができる選択肢を増やすことになる。捉えること・伝えることができる意味を増やすことが、子ども達とのコミュニケーション問題の解決し、対話を深めることに繋がると考える。

文献

- Kniffin, K. M., Narayanan, J., et al. (2021). COVID-19 and the workplace: Implications, issues, and insights for future research and action. *American Psychologist*, 76(1), 63–77. <https://doi.org/10.1037/amp0000716>.
- Halliday, M. A. K. (1985). *An Introduction to Functional Grammar* (1st ed.). London: Edward Arnold.
- 佐野大樹 (2024) 『生成 AI スキルとしての言語学』 かんき出版

「CALPの‘A’?’あるいは機能言語学の視点 —外国人児童生徒教育を担う教師の「言語」への目を磨く

南浦 涼介 (広島大学)

1 本発表の背景と目的—言語を子どもの内面の問題のみに落とし込まない

例えば次の点から考えてみたい。外国人児童生徒の教育でよく出てくる概念に J. Cummins の提唱した「CALP」がある (Cummins 1979, 1980)。CALP は本来は Cognitive / Academic Language Proficiency であるが、これは日本語において「認知・学習言語能力」(野山, 1992; 縫部, 1993) と訳されたり、「学習言語」(梶田・速水, 1994) と訳されるなどが試みられ、やがて現在人口に膾炙するような「学習言語能力」という訳語が定着するようになった。ところが、この「学習言語能力」という言葉は先の ‘Cognitive / Academic Language Proficiency’ を適切に訳せているだろうか。

まず ‘Cognitive’ に該当するものを「認知」とすることはまだよいとしても¹、‘academic’ は本来字義の通り「アカデミック」であり、academic とは「教育に関わる」という意味である。教育学では「学習」という子どもの内面から無意図的に生まれてくるものと、「教育」という教師の意図性との親和性が高く、子どもの外側であってその「対象世界」に子どもが関わっていくものを伝統的には概念として緩やかに区別してきた。その点で Cognitive が子どもの内面に关わるものであれば、Academic は子どもの外側に広がっている「対象世界」についてのものである。ところが Cognitive も Academic もどちらにも対して「認知」「学習」という子どもの内面に关わる日本語を当てはめてしまった。そのために、CALP が「学習言語能力」となった瞬間、それはすべからず子どもの内面の認知的な事項をまず想いさせ、他方で「子どもの外界に広がる対象世界の言葉」の側の事項の検討が弱くなってしまった²。

この点、英語圏では後述するように、ハリデーからはじまる「選択的体系機能言語学」という発想によってむしろ第二言語で学ぶ子どもたちの向きあわねばならない、「外側に広がる ‘Academic’」の検討の手がかりとして着目され、論が重ねられてきたことは対照的である。

このように、外国人児童生徒に向きあう教師にとって、子どもの外側に広がる「言語」のどのような特性に目を向ければいいのかということは現時点では曖昧になっていることが多い。一方で先にも触れたように、英語圏に目を向けると、移民の教育を考える際に「言語」への視点は選択的体系機能言語学を中心に検討が深められている。例えばシュレツペグレルは学校教育の言語にもちこみ、学校教育における歴史の記述と自然科学の記述、また学び手の書き言葉の成長に焦点をおいた検討を蓄積し、移民の言語的成長と学習のテキスト的性格の関係性から、学校教育における移民の子どもたちと言語を関連づけた検討を行っている (シュレツペグレル, 2018)。選択的体系機能言語学の視点はさらに、移民の言語的成長だけでなく子どもたちに向きあう教師教育においても援用が数多くなされるようになってきている (Lucas, 2010; Lucas, et al., 2014; Mickan, 2022, Accurso & Gebhard, 2021 ほか)。

こうしたことから、外国人児童生徒に向きあう教師たちにとって、子どもたちの「外側」に広がる言語 (それは常に ‘Academic’ なものばかりとは限らないが) の特性を捉えるときに、「機能的に言語を捉える」というのは非常に重要な視点をもたらす。またそれは「学習言語」なるものを単に子どもの内面の能力の問題と捉えることに陥らせず、目の前の子どもたちの言語の特性を分析的に捉えな

¹ これも心理学的にすぎ、実際には「思考」の方が意味が近いと思われる。

² 実際には教科書等の分析はなされているが、多くの場合「機能的言語」という視点ではなく、「形式的言語」の視点からの語彙分析になっていることがほとんどである。

がら、そこに向かわせていったり、調整をしたり、さらには評価的な視点を形成していくことにもつながっていく。

こうしたことから、本発表ではとくに外国人児童生徒に向きあう学校教師に対して、機能言語的視点を持たせていくための教師教育の方法論を、自分自身の教師教育実践から検討していく。

2 研修の概要

これまで上記の観点からの研修を数回にわたって、外国人児童生徒に対する教員に研修を行っている。いくつかの自治体において行っているものなので、以下は具体的などこかの自治体ではなく、それぞれの自治体で行ったものを総合的に捉えた研修の基本的な展開は次のようになっている。

1. 機能的に言語を捉えるということの意味
 - 『もしも文豪がカップ焼きそばを食べたら』の事例を見てみましょう。なぜこの人、このタイプだと、こうした文体になるのでしょうか。そこにはどんな特徴があるのでしょうか？
 - 文脈と関係性の中から言語を捉える概念
 - 関係性、媒体、言葉づかいの中にはどのような関係があるのでしょうか。
2. 外国につながる子どもと学校の言語
 - 「学習言語能力」から「学習における言語的特徴」への転換
 - 「学習における言語的特徴」と捉えることによってどのようなよさがあるのでしょうか。
 - 学校の中にはどのような文体ジャンルがあるのでしょうか。
3. 学校の言語の中にある機能的特徴を捉える
 - 実際に、「読書感想文」「理科の自由研究」「新聞の投書」「夏休み川柳」をもとに、そこにある文体の機能的特徴を書き出しましょう（DLA「書く」の観点を参考に）
4. 外国につながる子どもへの応用を考える
 - どのような応用可能性があるかを考えましょう
 - ただ「文体に子どもたちが合わせる」でいいのか、を考えましょう。

3 選択的体系機能言語学と学校研修の間の課題可能性と未来

学校の教師研修に落とし込んだときに機能言語学、とりわけ選択的体系機能言語学を用いたときの3つの課題点を指摘しておきたい。

第1に、選択的体系機能言語学の学問的な概念や用語の抽象度は高く、とりわけそれ自体が学校教員や支援者の日常とは距離のあるものが多い。単純に学問的な用語解説ではそもそも教育的に有用な概念として身につく物にはならないのは子どものみならず大人も同様である。概念への到達とともに、概念を表す用語自体をいかに組みなおしていくかが重要となる。

第2に、単に「ジャンル」という理解に落とし込んでしまうと、それは「このジャンルはこのような言葉づかいをするものだから」という子どもたちへの規範性の押しつけにもなりかねないことである。そもそも「選択的」である以上、本来、そこには言語使用者の側の「選択」の面があるわけで、社会的文脈に対応していくことと応答していくことの間での学び手の主体の面がどうあるかはなお検討していく必要がある。

第3に、教師に対する研修の一貫性に関することである。年に1度、あるいは数年に1度の講義とワークショップの研修が教師の知の形成や活用に関わる隙間はそれほど大きくない。これらをどう

中長期的な教師の成長に関わるような連続性あるいは一貫性のあるプログラムとしていくかは、なお検討すべき点である。

しかしそれでもなお、可能性として以下があることを指摘したい。

1 つめは、教師がこうした機能言語学的な視点を得ていくことは、冒頭に述べたとおり、学校において子どもたちの外側に広がっている「対象世界」の言葉を「ジャンル」という観点から捉え「今のこの時間にこのテーマにおいてどういう言葉を子どもたちは得ていくといいのか」についての指針を見つけ出すことができる。これは「教え」の言語的鍛錬だけでなく、「対象世界」と「子どもの表出した言葉」との関係性の中で言語を分析・評価していくことの言語的鑑識眼の形成にもつながりうる。

2 つめは、課題点の第2として挙げた「ジャンルの押しつけ」を回避する方法として「土俵を変える」試みである。「文体に子どもたちが合わせる」のではなく、子どもたちが様々な記号を駆使して「文体をつくりあげていく」ことを促していくことは、近年の記号の多様性＝マルチモーダルな記号としての言語、その機能の観点を磨いていくことで可能になっていくはずである。この点は、奥泉の報告とも今後関連していくところである。

3 つめは、こうした機能的な言語の観点自体を、外国につながる子どもたちのものだけではなく、学校全体の「言葉」の実践として組み直していくことが、畢竟言語的文化的な多様性の包摂にもつながっていく点である。小柳が分析・報告する1970年代から80年代におけるイギリスの「言語意識活動」の根幹にある language awareness の試みは近年日本語教育でも着目されているが、それは学校教育の言語としても、カリキュラムレベルで包摂を考える上で重要となる。こうした点を可能性として指摘しながら、このあとの報告者へバトンをつなぎたい。

文献

- Accurso, K. and Gebhard, M. (2021). SFL praxis in U.S. teacher education: A critical literature review. *Language and Education*, 35(5), pp.402-428
- Cummins, J. (1979). Linguistic interdependence and the educational development of bilingual children. *Review of Educational Research*, 49, 222-251.
- Cummins, J. (1980). The Entry and Exit Fallacy in Bilingual Education, *NABE Journal*, 4-3, 25-59.
- Lucas, T. (Ed)(2010) *Teacher Preparation for Linguistically Diverse Classrooms*, Taylor & Francis
- Lucas, T., de Oliveira, L. C. & Villegas, A. M. (2014). *Preparing Linguistically Responsive Teachers in Multilingual Contexts*, Springer Science and Business Media B.V, p. 219-230
- Mickan, 2022, Mickan, P. (2022). Systemic Functional Linguistic Perspectives in TESOL: Curriculum Design and Text-Based Instruction, *TESOL in Context*, 31 (1), 7-24
- 梶田正巳・速水敏（1994）日本語を母語としない子女に対する日本語の指導課程・指導方法の実践的基礎研究。科学研究費補助金 総合研究（A）03306019, 研究報告書。
- シュレッペグレル, M. J., 石川彰, 佐々木真, 奥泉香, 小林一貫, 中村亜希, 水澤祐美子（訳）（2014）『学校教育の言語—機能言語学の視点』ひつじ書房。縫部義憲（1993）児童日本語教育学の構築に向けて(1)—現状と課題：広島県を中心に。『広島大学教育学部紀要・第二部』42, 142-148.
- 野山広（1992）在日外国人児童・生徒への日本語教育に対する多文化教育的一考察『日本語教育論集』9, 35-66.

1. 求められる読解力の拡張とマルチモーダル・テキスト

学習者を取り巻くテキスト環境の変化に伴って、言語教育においても、絵や写真のような図像テキストや、それらと周辺に配された文章との関係を読み解く学習が必要視されるようになってきている。OECD 実施の生徒の学習到達度調査 (PISA) においても、読解リテラシーの対象テキストとして、絵や写真等を含む「非連続型テキスト」や「混成型テキスト」が含まれるようになって久しい。しかし、これらの読み解き方を系統的に教授・学習するための理論的枠組みやメタ言語の開発・整理は、まだ充分に行われていない。

そこで、本発表では上掲の「非連続型」あるいは「混成型」の類のテキストをマルチモーダル・テキストと総称し、外国につながる子どもたちの学習も念頭におきながら、それらの教授・学習の基盤となり得る理論的枠組みや、そこで機能言語学がどのように援用・活用可能かを検討・考察する。(なお本資料3節以後は、機能言語学の用語に倣い、読解や読み解きを「意味づくり」と称して論じる。)

2. マルチモーダル・テキストの読解における機能言語学的視点と方法

上述したような読み解く力の育成は、かつてメディア・リテラシー教育の中で、メディア (媒体) の特性理解と併せ行われてきた。しかし、SNSの普及と相まって、それらの学習内容は、視覚社会記号論やマルチモーダル研究と融合しながら、理論的枠組みの修正や新たな分析法の開発が行われてきている。本発表では、こういった流れの中で機能言語学的視点を取り入れ発展してきた SF-MDA(systemic functional multimodal discourse analysis) に着目して検討・考察を行う。この SF-MDA 研究は、2010年にこの分野に関わる34名の代表的な研究者によって、ハンドブック(Jewitt, 2010)が編集・刊行されたことをもって、一つの研究分野として確立したと考えられている。また、この SF-MDA 研究では、モード(mode)を、「歴史的な流れの中で社会・文化的に選択・形成されてきた記号資源 (semiotic resources)」(Kress, 2003: 79)と捉える点に特徴がある。

3. 機能言語学的視点(1)―3種類のメタ機能からの意味づくり

先述の SF-MDA 研究では、機能言語学を基盤としているために、図像からも文章部分からも3種類のメタ機能を用いて意味づくり(meaning making)を行う。第1発表者の佐野においても言及されているように、多層的な意味づくりにおける3種類のメタ機能とは、次の①～③である。

- ① 観念構成的メタ機能(ideational metafunction)
- ② 対人的メタ機能(interpersonal metafunction)
- ③ テキスト形成的メタ機能(textual metafunction)

これら3種類のメタ機能を組み合わせてテキストから意味づくりを行うことによって、図像の中で展開されている出来事やそこに関与する者や物、またその状況や場と文章との関係から意味づくりを行うだけでなく、次の2種類の意味づくりも組み合わせることで読み解くことができるようになる。②の「対人的メタ機能」による、読み手とテキスト中の人物との仮想的関係からの意味づくりや、③の「テキスト形成的メタ機能」による①と②の意味を相対的重要性や配置関係といった観点から意味づ

くりを行うという複合的な意味づくりの可能性である。発表では具体例を挙げながら、こういった機能言語学的視点を用いる学習の可能性を考察する。

4. 機能言語学的視点(2)―結束性の観点を援用した異記号間の関係からの意味づくり

さらに、本発表では、機能言語学的視点として、文章部分における「語や群、句、節」と、それらに相応する図像の各視覚的要素との間の意味的な「結束性」(Bateman, 2014: 165–174; Halliday, 1994)も検討を行っていく。この結束性とは、テキストを構成している「部分間の意味的關係」の結びつきの程度(ハリデー・ハサン, 1991: 116–119)のことで、ある文章や図像が有機的關係性をもつ一つのテキストとして「テキスト性」を持つために、「論理・意味關係」だけでなく、この各部相互の結束性も検討が必要になるからである(Bateman, 2014: 165–174)。

SF-MDA 研究では、ハリデーとハサンが提出した結束性の種類(ハリデー・ハサン, 1997)を基にして、Royce(2007)が、図像の各部と文章の相応部分、さらには図像の各部分相互のテキスト内における結束的な結びつきを捉えて検討する枠組みを整理している。その枠組みが、下の(1)～(6)の6種類の結束關係である。

- | | |
|------------|-------------|
| (1) 繰り返し關係 | (4) 全体・部分關係 |
| (2) 同義關係 | (5) 上位下位關係 |
| (3) 反義關係 | (6) 共起關係 |

これらによって、テキストを構成する図像とことばとの相応關係部分、さらには図像の各部分相互が、異なるモード間で意味を相互に補い合う様相を検討できるようになる。発表では、教科書教材等からも例示を行いながら、こういった機能言語学的視点を取り入れることによって、マルチモード・テキストからの意味づくり学習にどういった可能性が拓げられつつあるのかを考察する。

文献

Bateman, J.(2014).Text and image:A critical introduction to the visual/verbal divide. London:Routledge.

Halliday, M. A. K. (1994). *An introduction to functional grammar* 2nd edition. London: Edward Arnold.

Jewitt, C.(2010). (ed.)*Routledge Handbook of 33 Multimodal Analysis*. London: Routledge.

Kress, G.(2003). *Multimodal Literacy*. London: Routledge.

Royce, T.D.(2007). Intersemiotic complementarity: A framework for multimodal discourse analysis, *New directions in the analysis of multimodal discourse*. Lawrence Erlbaum Associates, Mahwah: NJ and London. 63–110.

照屋一博編著,クリスチャン・マティスン,ジョン・ベイトマン,奥泉香,ハイジ・バーンズ,マイケル・A.K.ハリデー(2022)『意味がよくわかるようになるための言語学一体系機能言語学への招待―』,くろしお出版.

ハリデー, M.A.K.・ハサン,ルカイヤ/寛壽雄(訳)(1991)『機能文法のすすめ』,大修館書店.

ハリデー, M.A.K.・ハサン,ルカイヤ/安藤貞雄ほか(訳)(1997)『テキストはどのように構成されるか:言語の結束性』,ひつじ書房.

イギリスの言語教育カリキュラムにおける機能言語学の受容とその後

小柳 亜季 (千里金蘭大学)

1. 言語意識運動の展開と機能言語学

言語的文化的に多様な子どもを包摂する教育のあり方を念頭においた際、機能言語学的知見がいかに関与するかを検討していくために、本発表ではイギリスの言語意識運動 (Language Awareness Movement) を中心に据えながら検討する。言語意識運動とは、「言語意識 (Language Awareness)」をキーワードに、言語教育上のカリキュラム改革を志向した運動であり、戦後イギリスにおいて移民が増加する中で展開されていった運動である。1970年代から1980年代にかけて、各学校レベルでカリキュラム開発がなされていった。

言語意識運動の中では、ハリデーの機能言語学的な視点を取り入れたカリキュラム編成が行われていった。「当時、ハリデーは比較的専門的な文法理論 (選択体系機能言語学) を展開していたにもかかわらず、奇妙なことに英国の教育界に与えた主な影響は、より理解しやすい言語学の分野におけるものであった」 (Hudson, 2024, p.126) とされるように、イギリスの言語教育への影響としては機能言語学の視点の一部であった。

2. 言語意識運動への機能言語学の影響

言語意識運動が展開されていった背景の1つとして、移民の増加や総合制中等学校における能力混合学級での授業の増加に因り、学習者が多様化していたということが挙げられる。移民の子どもたちのうち、特に西インド諸島出身の子どもたちについては、家庭で話される言語変種と学校で使用される言語変種の違いが大きいため、家庭での言語的支援 (= 「大人との時間 (adult's time)」) が十分ではないことで言語発達が十分に促されないことがあった (Hawkins, 1984, pp.14-17)。

言語意識運動の萌芽的な取り組みとして、1964年から1971年にかけて実施された「言語学と英語教育プログラム」において、多様な学習者の学習ニーズに対応しうるための教師の言語的識見が不十分であることが指摘された。イギリスの英語教育は文学を通して行うことが主流であったことから、言語そのものを教える手法が整っていなかったためである。

この「教師側の言語的識見」を論じる際に、ハリデーの所論が取り入れられ、このことが後の言語意識運動にも継承されていった。ハリデーは、幼児の言語発達においては、以下の7つの言語機能を、順番に獲得していくと考えていた (Halliday, 1975, pp.19-21)。図1の7つの言語機能は、子どもものの言語発達が進むにつれ複合的に使用できるようになっていく機能である (Ibid, p.42)。

- | | |
|---|------------------------|
| 1. 道具的機能 (instrumental) | 2. 統制的機能 (regulatory) |
| 3. 相互作用的機能 (interactional) | 4. 個体的機能 (personal) |
| 5. 発見的機能 (heuristic) | 6. 想像的機能 (imaginative) |
| 7. 表象的機能 (representational/informative) | |

選択的体系機能言語学で言及される3つの機能、①観念構成的メタ機能、②对人的メタ機能、③テキスト形成的メタ機能については、大人の言語使用において発揮されているメタ機能として区別されており、子どもたちが当初からこの3つのメタ機能を有しているわけではない。しかし、6.の想像

的機能と、7.の表象的機能を有する言語使用を行おうとするにあたって、次第にテキスト形成的メタ機能も発達していくことになると説明されている (*Ibid.*, p.58)。つまり、大人の言語使用のあり方と子どもの言語使用のあり方には違いがあるという点が強調されたのである。

一方で、学校教育において使用される言語は基本的に7.の表象的機能がほとんどである。また、教師が教室に入る前は、子どもたちは7つの言語機能をすべて活用していたかもしれないにもかかわらず、教師が授業を始めると同時に、「表象的機能」を有する言語使用のあり方しか認められない状況になっている (Doughty, P. et al. 1972, p.137)。この状況に対して、子ども自身がすでに使いこなすことができる言語機能を活用させつつ、次第に「表象的機能」に子どもたちを慣れさせるようにするような言語教育のあり方が、「言語学と英語教育プログラム」では重視された。また、子どもたちが疑問を持ってざわついているところを「質問するのはやめて、言ったことを書き写しなさい」と声かけすることのように、子どもが「無駄におしゃべりしている (idle chatter)」という認識を持つことは、教師が言語の「表象的機能」のみを重視していることを意味しており、教師の言語的識見が不十分であるためであると考えられた (*Ibid.*, p. 133)。そのことから、教師自身が「言語の探究 (exploration of language)」に取り組むことも、プログラムの課題として掲げられた。

第1部 言語：その性質と機能

テーマA：情報を伝達するために言語を使う

テーマB：表現的に言語を使う

テーマC：音声とシンボル

テーマD：言語のパターン

第2部 言語と個人としての人間

テーマE：言語と現実

テーマF：言語と文化

テーマG：言語と経験

第3部 言語と社会的存在としての人間

テーマH：言語と個々人の関係

テーマJ：言語と社会的な関係

テーマK：社会的組織における言語

その後「言語学と英語教育プログラム」の成果を取り入れて言語意識運動を展開させていったホーキンス (Hawkins, E.) も、場面に応じた言語使用のあり方を認識することを目的として、『言語を使うこと (*Using Language*)』という教材を開発している。ハリデーの提唱した7つの言語機能に即した内容としては、指示をする機能を持つ、レシピなどの表現を提示した上で「なぜこれらは曖昧ではない形で書かれることが重要なのか？」と問いかけることや、例えば日記を書いてみた上で「学校で書いたものと日記を書いたものの間には違いがあるか？」という問いが投げかけられている (Astley and Hawkins, 1985, p.10, 15)。つまり、学校で望ましいとされている書き方のみならず、幅広い言語使用のあり方から言語の学びを深めてもらおうとする教育内容編成となっていた。

また、移民の子どもたちのニーズにも焦点を合わせた内容として、子どもの言語発達の過程と、それに伴う家庭での言語的支援の重要性を示す内容も提示された。子どもたちがいずれ「親になるための準備」として教える必要があるという考えの下、『どのように言語を学ぶのか？ (*How Do We Learn Languages?*)』というトピックブックも開発された。この中で、子どもたちが大人と違う言語

表現をしているとしても、同じ言語上の機能を有していることに気づかせることが目指されている (Dunlea, 1985, p.19)。また、『どのように言語を学ぶのか?』は、「異なる言語の家庭における言語習得の『普遍性』の学習によって、多民族のクラスのすべての子どもたちが貢献できるもの」とされており (Hawkins, 1984, p.177)、子どもたちの言語習得の世代間格差を連鎖させないための取り組みであると同時に、子どもたちの言語の多様性を包摂する教育内容としても想定されていた。

3. 言語学的知見と教育的立場の相克

言語意識運動がまさに全英的に展開されていた 1985 年、2 つの言語学系の学会の連合体である、教育における言語学委員会 (Committee for Linguistics in Education、以下 CLIE) において、「学校言語学 (school linguistics)」と「学術言語学 (academic linguistics)」の 2 つのうち、「学術言語学」に立脚した「学校言語学」がカリキュラム編成の参照軸となるべきという主張が提示された。この中で、学術的な知見をふまえた教育内容であるべきこと、そして言語学の立場の多様性はあれど、共通用語として用いられてきた用語については、学校での教育内容に含めるべきことが主張された。CLIE 自体は、教えるべき内容を精査する際に「教えられる (teachable)」「価値のある (valuable)」「信頼できる (reliable)」という 3 つの軸を立てた上で、「信頼できる」ことを重視しているが、学校現場から生まれてきたカリキュラム自体は「教えられる」「価値のある」こともまた重視されてきた。選択体系機能言語学をカリキュラム編成に取り入れていく際に、これら 3 つの間のバランスをいかにとっていくかについては、現代の日本の言語教育カリキュラムを考える上でも問われていくといえよう。

文献

- Astley, H. and Hawkins, E. (1985). *Using Language*. Cambridge University Press.
- CLIE (1985) Guidelines for Evaluating School Instruction About Language. *The British Association for Applied Linguistics*, Spring 1985, pp.34-40.
- Doughty, P., Pearce, J. and Thornton, G. (1971). *Language in Use*, Edward Arnold.
- Doughty, P., Pearce, J. and Thornton, G. (1972). *Exploring language*. Edward Arnold.
- Dunlea, A. (1985). *How Do We Learn Languages?*. Cambridge University Press.
- Halliday, M. (1975). *Learning How To Mean: Explorations in Language Study*, Edward Arnold.
- Hudson, R. (2024). Linguistics in Schools The English Past, Present, and Future. In Corr, A. and Pineda, A.(eds.) *Theoretical Linguistics in the Pre-University Classroom*, Oxford University Press, pp.121-139.